

ボランティア・市民活動のコーディネーター・リーダー等推進者のための

2015
No.455

ボランティア情報

4



子どもたちの笑顔と 未来のために寄り添う

石巻市の避難所で避難生活を送っていたとき、幼い姉弟に出会った。家族とともに避難していた二人は、周囲が雑然とした中、騒ぐこともなく、ただひたすら我慢していた。

その姿を見たとき、次世代を担う子どもたちの心のケアが忘れられることに危機感を感じた柴田さんは、お絵かき教室やスポーツなどを通じた子どもの心のケアを活動目的とする「石巻こども避難所クラブ」を結成し、現在は「にじいろクレヨン」に改称して活動を行っている。

「最初は震災や避難生活のストレスにより、自分を見て欲しいという思いから言葉や態度が荒れていたり、逆に感情を失っていた子どもが多かった。今は子どもたちと信頼関係ができる、子どもたちも「にじいろクレヨン」が安心できる場所だと感じてくれたことで、生き生きした笑顔と人を思いやる心を思い出してくれた」と柴田さんはこの4年間振り返った。

「にじいろクレヨン」には3つの目標がある。1つ目は震災当時幼かった子どもたちが成長するまで長期に寄り添うこと。2つ目は子どもを中心とした「コミュニティを石巻から広げていくこと。3つ目は震災を乗り越えるという経験をした子どもたちが、将来のリーダーになること。そのため、柴田さんはこれからも活動を続けていくと力強く語ってくれた。

宮城県石巻市



特定非営利活動法人
にじいろクレヨン
理事長

柴田 滋紀さん

Contents

4月号 特集テーマ

シニア世代の新たなチャレンジ！

06 災害ボラセン運営の現場
2013年台風18号災害からの学び

07 ボラセンそもそも
ヒストリー

07 団体を応援するために
知っておきたい助成金のキホン
第1回
カネの切れ目が縁の切れ目？

08 ·保険のひろば
·ボラフェスふくしま番外編
·INFORMATION
·事務局だより



事例1

シニア世代の新たなチャレンジ！

2012年にはいわゆる団塊世代の最年長者が65歳に達し、社会的にも地域社会を支える新たな担い手として退職後のシニア層への期待が高まり、その活躍が期待されています。これまで培ってきたビジネススキルや経験、または人脈等を活かし、地域に暮らす一市民として地域にボランティアで貢献されているシニア層の、第2の人生としての新たなチャレンジについて、また、シニアを応援する仕組みについての取り組み事例をご紹介します。



上中里団地きらく会
会長

竹尾 清三郎さん(下右)

福祉の会会長
地区社協会長

村岡 宗夫さん(下右二番目)

民生委員

中村 行男さん(上左)

元・民生委員
榎本 静子さん(下左二番目)

民生委員
山川 千恵子さん(下左)

総務
大石 裕さん(上右)

かみなかざと 上中里団地きらく会

上中里団地は横浜市磯子区にある団地。1974年に入居開始し、現在43棟848戸。

早期に上中里団地自治会が創設され、いまも自治会活動をはじめとする地域活動が活発に進められている。

「上中里団地きらく会」は団地内の老人クラブとして、団地内自治会や団地内の福祉を推進する組織である「福祉の会」とも連携しながら、身近な隣人・友人である高齢者同士のふれあいや交流、助け合いを大切にする「友愛活動」を団地内住民主体で推進している。

上中里団地きらく会の活動はどのように始まったのですか。

榎本 上中里団地への入居が始まった翌年(1975年)に、団地に住むお年寄りから「高齢者同士が集まる機会があつたらなあ」と、相談がありました。入居当時は、各地から居住者が寄り集まつた状況で横つながりがありませんでした。また、当時は若い世代が多く、シニア世代の方から「お友達がほしい」という声を受けました。当時、民生委員になって2年目の私は、自治会に相談して、さらに自治会が区に相談して、団地

内の老人クラブである「上中里団地きらく会(以下、きらく会)」を立ち上げることになりました。

大石 きらく会の役員である班長は友愛活動員を務め、民生委員やボランティアと一緒に、ひとり暮らしの高齢者が集まる昼食会や見守り活動・支え合いなどの友愛活動、困りごと応援事業などを行っています。

村岡 初めは地区の昼食会に参加していましたが、団地の方で会場まで歩くことが難しく、楽しみにしていた昼食会に参加できない人がいたので、「団地に住んでいる自分たちでやろう」と1997年から始めました。これをきっかけとして、困りごと応援事業を同時に始めました。

困りごと応援事業のことを教えてください。

榎本 ひとり暮らしの高齢者はちょっとした困りごとをあっても我慢してしまう。相談しない、相談できない場合が多いですね。そこで、民生委員からの提唱もあって、お互いに助け合う、地域の中で助け合うことが必要だと団地内の住民に呼びかけたところ、100人近いボランティアが集まり、活動が始まりました。

竹尾 訪問や行事のときに話をしてそれとなく見守り、困りごとの受付をしています。電球の取替、水道パッキン交換、家具の転倒防止器具



上中里団地きらく会
(神奈川県横浜市磯子区)

地域交流から始まった 住民同士の助け合い活動

設置など、年間15件ほどの相談があります。

大石 相談した方からは「ありがとうございます」という感謝の声があります。また担い手からは「それほど大変ではない」という感想や「自分たちも楽しい」という声が多いです。

榎本 高齢者の方は特に同じ団地の住民に助けてもらったからと、相手に気を使いすぎてしまったり、相談自体を遠慮してしまうこともあります。ですので、そうならないよう、50円や100円程度の少額の手数料をいただくことにしています。

課題となっていることはありますか。

大石 いま、ボランティア登録者は123人いますが、その多くが70・80代です。多くの人が昼食会を始めた1997年から活動していて、横のつながりはとても強いのですが、若い世代に担い手が広がらないのが課題です。今は中村さんたち60代の人

にも役員を担ってもらって活動を広げようと考えています。

中村 私は元々、仕事オンリーで地域に積極的には関わっていませんでした。ただ、「福祉の会」が地域で活動をしているのを見て、ごく自然に「こういうふうにしているんだなあ」と勉強になり、退職してからは「少しでも地域のみなさんのお役に立てれば」という気持ちでやってみよう」ということで、今に至っています。

きらく会の活動は約40年、 昼食会や困りごと応援事業は 18年続いています。 継続の秘訣はなんでしょうか？

村岡 1つは福祉の会をつくったことです。通常、自治会の役員は1年交代が多いですが、それでは組織や活動がそのまま継続するとは限らない。一方で福祉の会は体が続く限り、その任期はないんです。

大石 きらく会は人がよく集まります。毎月集まりがあるし、よく旅行

にも行きます。また、同好会・趣味の会がきらく会の中に9つもあります。2014年度の活動の参加者は延べ5774人もいますよ。

榎本 昼食会に来ると、みなさんに会え



る。お茶を飲んで、おしゃべりができる。おいしい食事もいただける。「ここに来るのが楽しみです」とおっしゃる方が多いですよ。

村岡 担い手側もやりがいを感じることが大切ですね。

榎本 そうなんです。参加している人が楽しんでくださっているんだなあって感じると、こちらも嬉しくなります。

山川 まず自分たちが楽しいと思えないと、なかなか活動は続けられません。自分が幸せ、楽しいと思える活動だから参加するし、継続できるんでしょうね。



ボランティア情報 特集

FEATURE ARTICLES
事例2

NPO法人グラウンドワーク笠間
理事長**塙 茂 さん****NPO法人グラウンドワーク笠間**

2011年11月：準備スタート
2012年3月：NPO法人認証
会員74人（うち、スタッフ34人）
会員：個人会員・法人会員
オーナー制度の出資金：
1万円出資で3年間オーナー権利。毎年
1回生産品・加工品等を贈呈

スローガン

地域の未来に笑顔の種をまこう！
片手にスコップ＆片手に缶ビール♪

2014年度

「プラチナ・ギルド アワード」受賞
(主催:NPO法人プラチナ・ギルドの会)

**なにかしたい……
そうだ、自分たちで始めよう！**

グラウンドワーク笠間は、シニアが輝いて活躍できるステージを創り出し、楽しみながら社会貢献に取り組んでいます。

いま、日本の社会では少子高齢化が加速していますが、シニアはまだまだ元気で輝いて活躍できるステージを求めています。

私自身は長年勤めてきた会社を57歳のときに早期退職しました。「退職後はノンビリと過ごそう」と思っていたので



特定非営利活動
グラウンドワー
みんなが
一緒に汗をかき
笠間が好きだとい

**シニアが集う場と
汗をかくステージを構築しよう**

現在は3つの活動の柱、①農業6次産業化の推進、②コミュニティカフェの運営、③社会貢献活動を展開しています。

最初に始めたのは畑作業ですね。畑をやりながら、汗をかくよろこび収穫のよろこびを味わいたい。おまけに若干の収入が入ればいいな。茨城県笠間市は豊かな自然環境があり、農業が盛ん。自然環境を次世代に継承する。地産地消で社会貢献になる。こんな感じで始めましたね。地域の休耕地を借りた「夢ファーム」（4か所・約2000坪）で、栗、ブルーベリー、ヤーコン、野菜類の生産をして、これらを栗の渋皮煮やジャムやランチなどに加工して、販売しています。

コミュニティカフェはN P Oになって



法人
ワーク笠間（茨城県笠間市）
かさま

輝けるステージを創ろう

ましょう！
いう気持ちと楽しむ心があれば大丈夫

から1年後の2013年3月に立ち上げました（笠間民芸の里の一角に開設）。要は、みんなが集まる場が必要なんですね。「集まる場をつくるなら、みんなが輝けるステージにしたい」ということで「グランパパとグランマのお店」を始めました※2。

社会貢献活動は活動当初から進めています。小さいことから大きいことまでありますよ。例えば、毎朝の立哨など学童の通学安全サポート、子ども会活動の協働実施、地域の防災・避難訓練のサポート。それから、「笠間のまちおこしに貢献したい」という思いから、イベントや地域活性化事業に参加しています。観光のまち笠間では活発にイベントが開催されていて、私たちはテントを背負って出向き、あちこちで店を出しています。地域の少女サッカーチーム・プルチーノFCの支援もしています。お互いに相思相愛になって、プルチーノFCの事務局をグラウンドワーク笠間に置きました。県予選で優勝して全国大会出場するすごいチームなんですよ。彼女たちが、なでしこジャパンに入って、東京オリンピックで活躍する。そんな夢も抱いています。



あつまる＆まじわる＆つながる

一緒に汗をかくスタッフは34人います（男女比は男性2：女性1）。スタッフは友人を誘う形で増えていきました。メディア等で活動を知って「自分もやってみたい」と思い参加した人もいますよ。「都合のつく人が集まろう」という感じで、毎日5～8人が集まり、交代しながら活動しています。

各事業は事業部制にはなっていますが、会社とは違うので、上下関係なしの対等な関係でやっています。愚痴も出ますよ。そこは、ていねいな合意形成でやっていますね。スタッフ一人ひとりの希望や経験を活動に活かしていくければと思っています。

それと、農業や地域活性などの専門家の方々が私たちの活動に関わってくれ、人脈を広げ続けています。

集まるステージができた

同じ思いを共有する人が集まる場が必要だと思うんですよね。活動を始めて3年が経って、ステージができる、みんなが自分のリズムで集まって、一緒に汗をかくことができるようになりましたね。

シニアの活動が3年続いていることが珍しいのか、取材を受けるようになりました。「私たちの小さな成功事例をいつでもご説明しますよ。横展開で広げま

しょう」と私は言って回っていて、話を聞きに来る人も増えました。そのときに、「そうはいってもね……難しいよ」と言われることがあります。一步踏み出すことや仲間集めがなかなか難しいかもしれませんね。そこは、熱く語って、仲間をつくって、ぜひ、立ち上げてほしいなと思います。

夢を描いて、夢に向かって、活動中

グラウンドワーク笠間は、2014年から、シニアと若い人とのコラボレーション・多世代間交流を進めていこうと舵を切り、インターンシップで大学生と一緒に勉強をしてきました。そして、一緒に学んだ若者が活動に魅力を感じてグラウンドワーク笠間に入職してきました。うれしいですよね。

ラオスに学校をつくろうと、私たちは1歩踏み出しました。民芸品などをフェアトレードで購入して私たちの店で販売してラオスの人たちの仕事を応援する。さらに、その収益などで学校建設をめざすプロジェクトを進めています。

夢を描いて夢に向かっています。やりたいことは、まだまだ山ほどありますよ。



※2 グランパパとグランマのお店では、おしゃべりサロンなどシニアや多様な世代が気軽に集い、おしゃべりできる場を提供。環境や食育等の市民団体や大学とも連携している。

メニュー：コーヒー、野菜すいとん、いなり寿司、季節の定食、栗豚等。新鮮野菜や手芸品も展示販売

災害ボラセン 運営の現場

今後も多発することが想定される災害。今だからこそ知りたい災害ボラセンの設置・運営にあたっての基本的な考え方を、災害支援の経験豊富なひのぼらねっと・山下さんが対談形式で毎回紹介します。



滋賀県高島市社協会事務局長
社会福祉協議会
滋賀県高島市
井岡仁志さん

日野ボランティア・ネットワーク
山下弘彦さん
2000年、旅の途中で鳥取県西部地震に遭遇し、日野町でボランティア活動。被災後の地域づくり活動を継続している。県内外で防災減災や支え合いの取り組み支援を行い、災害時には社協やNPOなどのネットワークをいかして支援にあたる。

2013年台風18号災害からの学び

滋賀県高島市社協へおじやましてきました

2005年、高島郡5町1村が合併して高島市が誕生した。
2013年台風18号による被害状況：9月16日午前3時・午前4時5分に市内の4圏域（旧町村域）へ避難勧告を発令。5時頃に鴨川が決壊した。浸水被害は広域で発生した。床上浸水109世帯（このうち約90%が高島地域に集中）。山間部では土砂災害も随所に発生した。
災害VC設置：9月18日（水）ボランティア募集、活動開始。被害の大きい旧高島町南鴨地区と、距離の離れた朽木地域にサテライトを設置。

住民主体の動き・地元のネットワークが必要だ

山下 もともと高島市は災害の経験やリスクはどんな状況だったのでしょうか。

井岡 1953年の台風で大水害が起こり、多くの方が亡くなりました。それ以来、大きな災害は起こっていませんでした。

山下 井岡さんが他被災地の支援や、高島市での防災ネットワークづくり等に取り組んできた経緯は。

井岡 2004年に中越地震で被災した山古志村の映像を見て、よそ事でないと思いました。私は旧朽木村社協に入職して間もなく、地域でなにをすればよいのか考える必要もあって、近畿ブロック府県内社協の職員派遣に志願して川口町へ支援に入りました。

2007年、能登半島地震では穴水町に支援に入りました。このとき、地域外のボランティアが他市に集中し、穴水町は外部支援者が少なかったので、社協と日常からつながっている民生委員やボランティア福祉団体等が駆けつけてきました。地域の力を目の当たりにしたのです。穴水町での体験から、地元のネットワークづくりが大事だと改めて感じました。

2007年9月から高島市災害ボランティア活動連絡協議会（災ボラ連協）の準備を始めました。工夫したのは、団体の長だけでなく、思いをもった個人も参加できる組織づくりにしたことですね。こういった方々が熱い議論を重ね、ネットワークが形成されていったのだと思います。

山下 参加する人たちの意識がどのように住民主体に向かっていったのですか。

井岡 2009年に災害ボランティアリーダー養成塾を開始し、災害ボランティア活動とは何か、地元がどういう役割を果たしていくのか、ワークショップ等を重ねてきました。災ボラ連協と一緒に災害ボランティアセンター（災害VC）立ち上げ訓練もしました。

意識が変わったのは東日本大震災後ですね。震災直後、災ボラ連協のメンバーが集まり、「自分たちになにができるのか」と話し合いました。その後の定例会では、「地域防災力を向上するために、住民の意識向上や自治会の組織体制強化が必要だ」といった意見が出てきました。地域防災力の向上が自分たちのミッションだと、このときに明確になったのだと思います。その後、災ボラ連協メンバーが中心となって、自治会での出前講座や、住民に呼びかけて防災懇談会を開始しています。

台風18号災害VCの動き

山下 台風18号発災当時の資料をみると、①被害は局所的だが、市域全体で大小の被害が点在している。大きな被害場所に気を取られすぎず、全体の状況を把握する。②行政や集落の区役員の把握している情報は速報値と考え、被害数・地区は増えることを見込んでおく、とあります。こうした視点で臨んだのは、これまでの経験からですか。

井岡 災害ボランティア活動支援プロジェクト会議（支援P）等で仲間と一緒に仕事をして、いろいろ学んできたからですね。

山下 地域の被災下での状況をきちんとアセスメントされていますよね。

井岡 職員が目視で確認した被害状況や被災した地域の住民から聞いた話に加え、その地域が元々もっている力、これらを総合的に見ながら支援のあり方を考えましたね。

山下 災ボラ連協や住民はどう動いたのですか。

井岡 災ボラ連協は9月17日夜に緊急会議を開いて、災害VC運営では、メンバーが主体的・継続的に関わっています。

延べ2,862人が活動したボランティアのうち半数を超える1,525人が高島市民です。日頃か

ら社協とつながっている様々な住民組織もたくさん災害VCに駆けつけていただきました。

山下 潜在ニーズへの対応は。

井岡 SOSを出しにくい世帯もあるので、発災初期に民生委員や区役員・住民からしっかりと聞き取りを行いました。活動開始後は9月の3連休明けの26日にニーズの再調査を行い、必要があれば集中的にチラシのポスティングを行うなど、把握に努めました。

山下 外部支援者に連絡したのはどのタイミングですか。

井岡 発災3日目、本格的に活動を始めると同時に支援Pの仲間に連絡しました。来てもらって本当に助かりました。

山下 例えば、どんなことで。

井岡 運営者は総合的なマネジメントが求められます。地元ならではの多様なしがらみの中で運営をしていく難しさもあります。先を見通すときに、どういうやり方がベストなのか、悩むこともあります。こんなときに客観的な立場から「それで大丈夫だ」という後押しや、「こんな方法もありますよ」と違う視点からの助言が欲しい。これらをわかやまNPOセンターや大阪ボランティア協会などの仲間がしてくれました。テーブルを広げて、多くの人に参画してもらうセンター運営ができたと思います。

運営者になって感じた、災害VC運営に必要な力

①重要なことは日頃から住民とどう向き合っているかというワーカーの姿勢だ。被災という環境変化に惑わされず、生活課題をアセスメントする力が基本的に備わっていれば、その応用力で対応できる。

②地域住民・団体のネットワーク化と、センターへの主体的な参加があることで地元主体の災害ボランティアセンターになる。

③電話1本でSOSが言える、専門性の高い外部支援者との顔の見えるネットワークが必要。

④人・モノ・金・情報・ネットワーク等のリソースを柔軟に活かすことができるマネジメント力が求められる。多くの資源と日頃からつながり、ノウハウとして蓄積されているか。

ボラセンそもそもヒストリー

“あたりまえ”的存在

皆さんこんにちは。関西学院大学の岩本裕子と申します。

突然ですが、あなたは「ボラセン（＝ボランティアセンター）」を知っていますか？愚問ですね。恐らくそ本誌の読者でその存在を知らないという人はいないでしょうね。現在の日本においてボラセンは、その実態は多様ではあるけれど、各都道府県、市町村ごとや、その他にも色々なボラセンがあり、皆さんにとっては、そこにあるのが「“あたりまえ”的存在」と言っても過言ではありません。

その“あたりまえ”的ボラセンですが、社協という立場から見てみると、市民社会の到来とともにそのあり方は多様となり、「ボラセンと言えば社協」というイメージが、現在では「本当に社会に対して効果的にその機能を果たせているのか」、「ボラセンは社協だけの専売特許

ではなくたった」等、社協ボラセンについて危機感をもって語られることもしばしばです。

しかし一方では、地域包括ケアや介護保険、生活困窮者自立支援法等、昨今の福祉をとりまく状況下では、ボランティアやNPO等の多様な組織や人々に大きな期待が寄せられています。つまりそれに伴い色々な意味で、ボラセンの果たすべき役割は今後益々大きくなってしまいます。逆にこれを積極的に捉えるならば、「ボラセンここにあり」と打って出てその存在を世に知らしめるチャンスであり、市民社会の構築に大きな役割を果たすことができるか否か、そのあり方が問われているとも言えます。

歴史は未来のためのもの

～次なる一歩のために・・・～

このような中で、この“あたりまえ”的存在は、果たして本当に“あたりまえ”

関西学院大学 人間福祉学部 助教

岩本 裕子さん

大阪市社協と区社協でボラセンコーディネーターを20年近く経験し、その後研究者の道へ。そんなこんなで、ボラセンを愛してやまない大阪のおばちゃんです。



なのでしょうか？決してそうではなく、変化する社会の動きのなかで先人達の思いがカタチとなり、糸余曲折を経ながら今があるはずです。

歴史を問い合わせることは、すなわち自分達の今を知ることに他なりません。今こそ、自分達の立ち位置を知り、捉え直すことで、先を見据える必要があります。それでこそ次なる一歩が見えてくるのではないかでしょうか。

…ということで、新年度に入り、次回からは私、岩本が、その歴史をひも解きながら、皆さんと共にボラセンについて考えていきたいと思いま～す。

社協ボラセンをめぐる課題については、『社会福祉協議会における第3次ボランティア・市民活動推進5カ年プラン』（全社協2008年3月）に詳しく記載されています。

<http://www.zcwvc.net/関係資料・書籍/ボランティア-市民活動関係資料/>

団体を応援するために 知っておきたい助成金のキホン

第1回 カネの切れ目が縁の切れ目？

社会福祉協議会のボランティアセンターで7年ほど働いているとき、多くの団体から「お金がなくて…」という相談を受けました。ボラセンに「これどうぞ」と渡せるお金は一切なかったので、寄付を集めめる方法や助成金の情報を伝えしながら、相談にのっていました。

2011年に転職し、赤い羽根の中央共同募金会で東日本大震災に関する助成（ボラサポ*）の担当になりました。そこでしみじみ思ったのは、お金があるところを向いてくれる団体はたくさんいるのだなあということです。ボラセン時代に「ネットワークを作りましょう」と声をかけてもこれほどの団体とつながることはできませんでした。でも“お金”にはそ

の力があるんですね。

そしてそれから4年。今思るのは「お金は確かに縁を作ってくれる。けれど、助成期間が終わってしまうと、団体との縁はたいていそこで切れてしまう」ということでした。ボラセンを始めとした中間支援組織はお金のないところがほとんどだと思います（失礼）。でも、団体が助成金を選び、応募書を書き、助成金を得てから活用するときのそれそれで相談にのれるところは、「縁が切れる」ことにならないのではないかでしょうか？

このコーナーでは、みなさんが団体からお金の相談を受けたときに「縁をつなげる」答えができたらいいなと思い、助

成金の応募や、活用のために押さえておきたいポイントを毎月わかりやすく教えていただきます。

成金のポイントをお伝えしていきます。

「ボラセン時代にこれを知っていれば…！」そんなことをみなさんと共有したいと思いますので、どうぞお付き合いくださいね。

*ボラサポ：赤い羽根「災害ボランティア・NPO活動サポート募金」。

<https://www.facebook.com/borasapo>



中央共同募金会
企画広報部

じょう ち さと
城 千聰さん

2003年から都内社会福祉協議会でボランティアコーディネーターとして勤務。2011年4月より現職。現在は主に東日本大震災の被災地で活動するNPOなどを支える「災害ボランティア・NPO活動サポート募金（ボラサポ）」の助成金を担当し、これまでに4300件以上の応募書を読む。ボラサポ公式Facebookページで情報発信中。



ボランティア行事用保険

ボランティア行事用保険は、地域福祉活動やボランティア活動の一環として行われるさまざまな行事の・・・

- ◎主催者や参加者のケガ
- ◎主催者の賠償責任（主催者責任）を補償します。

【平成27年度 改定のポイント】

- ①死亡保険金・後遺障害保険金（限度額）の補償金額を改定しました。
- ②Aプラン行事（宿泊を伴わない行事）に「A3」区分を新設し、3区分となりました。A3区分の行事例：サッカー（車椅子含む）、フットサル、カヌー教室、カヤック、硬式野球、スキー他。詳しくはパンフレット等でご確認ください。
- ③Bプラン行事（宿泊を伴う行事）の保険料を改定しました。

		補償金額	保険料	
死亡保険金		400万円	A-1	28円
	後遺障害保険金 (限度額)	400万円(1級)	A-2	126円
入院保険金日額		3,500円	A-3	248円
	手術保険金 外来手術	35,000円	Bプラン	1泊2日 239円
通院保険金日額		17,500円		2泊3日 293円
	賠償責任 (限度額)	2,200円		3泊4日 298円
賠償責任 (限度額)	対人	2億円	Bプラン	4泊5日 352円
	対物	1,000万円		5泊6日 357円
				6泊7日 362円

ボランティア行事用保険よくあるご質問 (Q&A)

Q1 ボランティア行事用保険の補償はいつから開始するのですか？



A1 加入手続き完了日の翌日午前0時以降の行事開催日から補償されます。加入手続きの完了とは、申込者が保険料を全社協指定口座に払い込み、「加入依頼書」（社協確認印押印済）を専用封筒で送付・提出した時となります。

Q2 予定していた行事が大雨のために順延となってしましましたが、どのような手続きが必要でしょうか？



A2 行事日程が順延となった場合は、加入を受けた社協を通じて、原則として行事開催予定日の前日までに変更手続きをしてください。予め順延日が決まっている場合は、加入の際、加入依頼書に順延日を記載しておいていただければ、改めて連絡する必要はありません。なお、順延が当日にしか判明しない場合は、翌営業日までに速やかに連絡してください。

ボランティア活動保険等についてのお問合せは、株式会社 福祉保険サービスまでどうぞ。

TEL/03-3581-4667 FAX/03-3581-4763 URL <http://www.fukushihoken.co.jp/>
ボランティア活動保険等の補償制度は、社会福祉協議会およびその構成員・会員ならびに社会福祉協議会が運営するボランティア・市民活動センターなどに登録されているボランティア・ボランティアグループ・団体が加入対象です。

**ボラフェス
ふくしま番外編**

プレゼンター

第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま実行委員会委員
ふくしまの今と未来部会 委員
福島県生活協同組合連合会 専務理事
佐藤 一夫さん

2015年の全国ボランティアフェスティバル開催地・福島。
福島のことをもっともっと知って皆さんもボラフェスふくしまに参加しましょう！

福島県は豊かな海、山、田畠があり、魚や山菜、米や野菜、果物から畜産まで、地元でほぼ全ての食材を販賣する日本の中でも数少ない総合産地でした。また、絶妙な寒暖差と肥沃な土壌は、美味しい農産物をたくさん生み出してくれました。しかし、東日本大震災、東京電力福島第一原子力発電所の事故で状況が一変。農林水産業は大打撃を受けました。

地元のJAや農家は、土壤調査、吸収抑制対策、圧倒的な量の出荷前検査、米は自家保有米も含め全ての米を調べる全袋検査を行い、安全な農産物を出荷しています。漁業者は未だ試験操業という制約の多い漁を続けています。食事調査でも食事に含まれる放射性物質が規制値よりかなり少ないということがわかっています。こうした福島県の食の安全の取組みを実感するとともに、美味しい県産の食物でのおもてなしを楽しみにしてください。



全国ボランティアフェスティバルふくしまの円滑な開催、運営に資するための寄付金及び協賛広告を募集中



アドレス <https://www.facebook.com/volufesfukushima>

「ボランティア情報」では、みなさんからのご意見や情報を募集しています。

ご意見ご要望等どのようなことでも結構です。企画の参考とさせていただきますので、全国ボランティア・市民活動振興センター(vc00000@shakyo.or.jp)までお知らせください。

事務局だより

今月から掲載内容もリニューアルし、新連載も始まりました。お手にとっていただいた方から一つでも多くの「いいね！」がもらえる冊子を目指したいので、皆様からの“こんな情報ほしい”“こんな特集読んでみたい”というご意見をお待ちしています。（金谷内）